



廣井博士傳記物語

表紙のこと

堅實にして剛膽なる博士の生涯を表現するには鐵の如き色を以て傳記の表紙を飾つたが良いかも知れない。

太陽の如く偉大にして温かい博士の愛は、緑の如き平和の色を以つて傳記の表紙を飾つたが良いかも知れない。

博士の生涯には一點の陰影もない、常に太陽の如く明るく温いものであつた。それ故遂に平和の明い色たる青空の如き布表紙と決定せられた。

表紙には題字と博士の家紋とを金箔で深く押込まれた。青の明い色の上に金箔の紋は如何にも派手な

もので、那波博士なども一驚してゐられた。それは那波博士ばかりではない、草間博士も田中博士も山口博士も派手な表紙に意外の有様であつた。

題字の『工學博士廣井勇傳』の文字は土木學界の元勳たる古市男爵の揮毫で、老男爵とも思へない程に力に満ちた文字である。表紙の家紋は博士の四女京子さんの筆に成つた圖である。

製本の表装は北海道方面の委員からも少しは立派にして貰ひ度いと云ふ希望であつたらしい、天念にはしなかつたが、兎に角あの位の出来なら相等に明るいものとなつた。

口繪のこと

口繪の数は最初の豫定では十五枚位であつたが、途中で次第に増加して遂に三十餘りになつた。餘り多くなつたので全部を口繪に入れるよりも、本文中にも挿入して傳記の本文と直に對照出来る様にする事になつた。

寫眞なども一度決定して製版の出来上つた後に良い寫眞が発見されて製版を更へたものもあつた。それも本文の印刷が終り近い頃に變更したのであつた終り頃になつてから名井博士が北海道から持つて歸られた廣井博士が十六歳の時の札幌農學校入校證書などは實に立派な資料で、何うしても追加すべきものであつた。入校證書と云ふても一種の誓約書であるが、入校の條件が中々振つたものである。且つ博士の文字は十六歳の少年とも思へない立派なもので勇氣に満ちた筆勢である。現在此の入校證書は北海道帝國大學の秘藏品となつてゐたものであるが、同大學教授の倉塚博士が特に嚴重な期限付で借出されたものである。此の證書はコロタイプ版にして挿繪の第一に追加する事になつた。

口繪として九月になつて決定されたものに廣井家の墓所があつた。九月中には必ず出版完了の豫定で進んでゐた處へ、口繪や挿繪の追加が出て來たので期限の點も心配になつて來た。墓所の寫眞は東大の山崎教授が九月上旬輕井澤から歸つて來て後に私の處へ届けられたのであつた。其寫眞は博士の長男剛氏が米國から歸朝された時に撮影したものだとの事であるが、名刺判の小寫眞で位置も鮮明度も何うも面白くない、それが口繪として間に合はないので私は多磨墓地へ新に撮影に出掛ける事に決心したが、天候が悪いで困つてゐた。晴天を待つてもあられないので遂に九月十七日私は一人寫眞機を持つて出掛けた途中から雨が降り出したが仕方がない、雨中を博士墓前に參詣して案内の少年に墓所を掃除させ秋の草花を捧げて、墓の正面にアンゴを据へ付け雨中撮影をした其寫眞が傳記墓所の項に出てゐるあの挿繪である。

口繪は全部寫眞版の豫定であつたが、上海港改良技術會議の狀況などは、寫眞の寸法が大いので折込まねばならない、それで折目に傷を付けない爲めに上質紙へコロタイプ版で印刷する事になつた。此の口繪を見ると博士の顔が幾分やつれて見える。

實際に上海港改良會議は歐米一流の技術者を集めた一種の國際的討議とも見られるもので、東洋から出が代表の唯一人として、博士が我國威の爲めに如何に苦心努力したかを窺はれるものである。

札幌農學校卒業當時から渡米前後の博士は極度の強學をされたもので、衣食を節して友人などとも殆んど交際を絶ち、守錢奴と言はれても知らぬ顔で勉強された。其當時の寫眞は非常に面やつれがしてゐる。

挿繪の中に加へた行燈の寫眞は、博士が昔の教え子たる十川氏の隱退生活を見舞ふ爲めに贈つたものである。行燈を贈られた十川氏は恩師の溫情を感謝の餘り、其の行燈と博士の歌を寫眞に撮りこれを製版して繪葉書となし知友に配つてゐられた。傳記の中の寫眞版は實に十川氏が製版されたものを小包で送つてよこされたものである。挿繪の中には種々珍しいもののみであるが、他の製版を使用したのは十川氏からのもの唯一つである。

口繪の最初にある博士の寫眞は一度寫眞版に製作したが、面白くないので遂にコロタイプ版にした。此の寫眞は博士が基督教の信仰に入つた恰度五十年目の記念に撮つたもので、それは昭和三年の初夏ハリス師の墓前に於て内村鑑三氏や新渡戸橋造氏など同窓の友數人と俱に撮影したものである。其寫眞の中から博士一人を復寫したものである。それは博士の最後の寫眞であり、日つ平和なる溫情に満ちた晩年の博士を最も能く表はしたものである。

其寫眞の下のサインは博士が東京帝國大學で講義した橋梁の草稿の綴込の中から轉載したものである博士の英字は實に立派なもので、寧ろ日本文字よりも達筆と思はれる。其講義草稿は最初の一頁を口繪の第六に加へた。

英文の立派なものには各博士連も舌を巻いてゐた。之は博士が十四五歳の少年時代に非常に英語に力を注ぎ、其後渡米前後まで極度の勉強をされた爲である。

博士の文章は少年時代に漢文で精練されたものであるから、達意の名文が多い、博士の著『日本築港史』などは技術的の著書としては實に名文である。口繪の中に原稿の一例として『懷舊談』の一部を寫眞にして加へたが、之は名文と云ふよりも體驗を物語る尊い寶物の一枚である。(以下次號)